

特41

495

館新法會育教本日大

八	四
三	五
一册	五函

架四號

今世義烈英雄鑑

全

松本長四郎著

004441-000-9

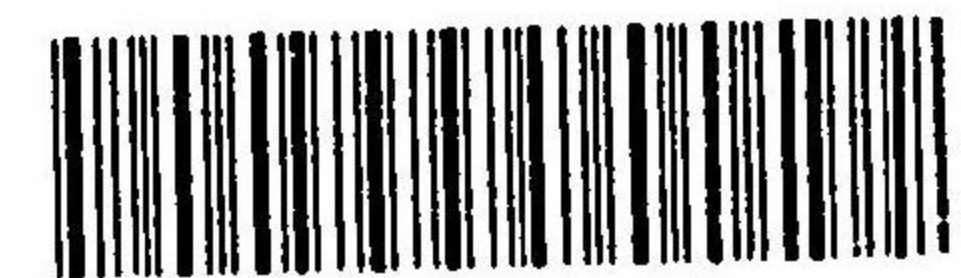
特41-495

今世義烈英雄鑑

松本 長四郎/編

M14

ACE-0953



松本長四郎編輯

今世

義烈

英雄鑑

全

明治十四年
十月新刊

翰笈堂主藏

特41
495

平野國臣

福岡の藩士に於て和漢の書を好み又武道に達す安政五年
姓名を奏して都甲権亮として京師に上り同盟の者と
尊攘を唱ふれ共成らず此時國臣の同盟に清水寺の
僧に片照と

云者あり
難を避く

福岡に至



山伏と

辛くも鹿兒島に至る西郷隆盛力を
匿す然れ共追捕急なるに臨み隆盛諸共小
日向に渡ると風波強く舟進まずを

東
山伏
鹿兒島



月照ハ死シ隆盛ハ
 漁生テ大嶋に流サる
 國臣改ヨリ々々
 京に入る時に
 幕府の臣間部某
 義士を捜る甚だ嚴ナク
 中へに備中に至リ又馬關に
 忍び筑後肥後に往来して
 同盟を募リ又薩に入て去ると
 十時に嶋津和泉其志一を
 賞して金拾兩を与ふ國臣三策
 を京師に獻トマサリ尊攘を



平野國臣

嶋津和泉

唱ふ此時に當り國臣の名天下に車轉く因りて
 幕吏の搜偵嚴にりて遂に捕らるるが由りて
 上京一學子習院
 出仕を拜命す
 此時中山忠光
 兵を大和に率
 國臣鎮撫に赴きて
 成らず其但州に
 走り兵を
 生野に
 率て豊岡兵に捕らるれ
 安政六年七月京師にて殺せらるる時に年三十九



野村於え
 福岡藩士浦賀
 勝幸か女なり
 其性質剛
 氣にりて
 男子に
 優れり且容
 貌美にして二十四才の
 時同藩の士野村貞貫に
 嫁す文道に達し煎茶
 挿花の技に長ず貞貫死してより
 剃髪なり名を望東と改むるれり諸國を



遊歴するに和歌を以てす

此時に当り勤王の士

諸々に集り天下已に

乱れんとす

望東王室の

陵替たるを

痛み女ながも

天下の豪傑と交る

時に長藩の士高枚春風なる者あり

幕吏の搜索嚴なるを避り筑前福岡に至る

望東糧食を忘れて我別荘にかきす囚て高枚

高枚春風



免る事を得たり

慶應元年に至り

福岡の藩中大いに

乱れ正義の士

二十余人を殺す

此時望東にひかへ

其前士を匿せし罪に

死一等を減し流に處せしれ

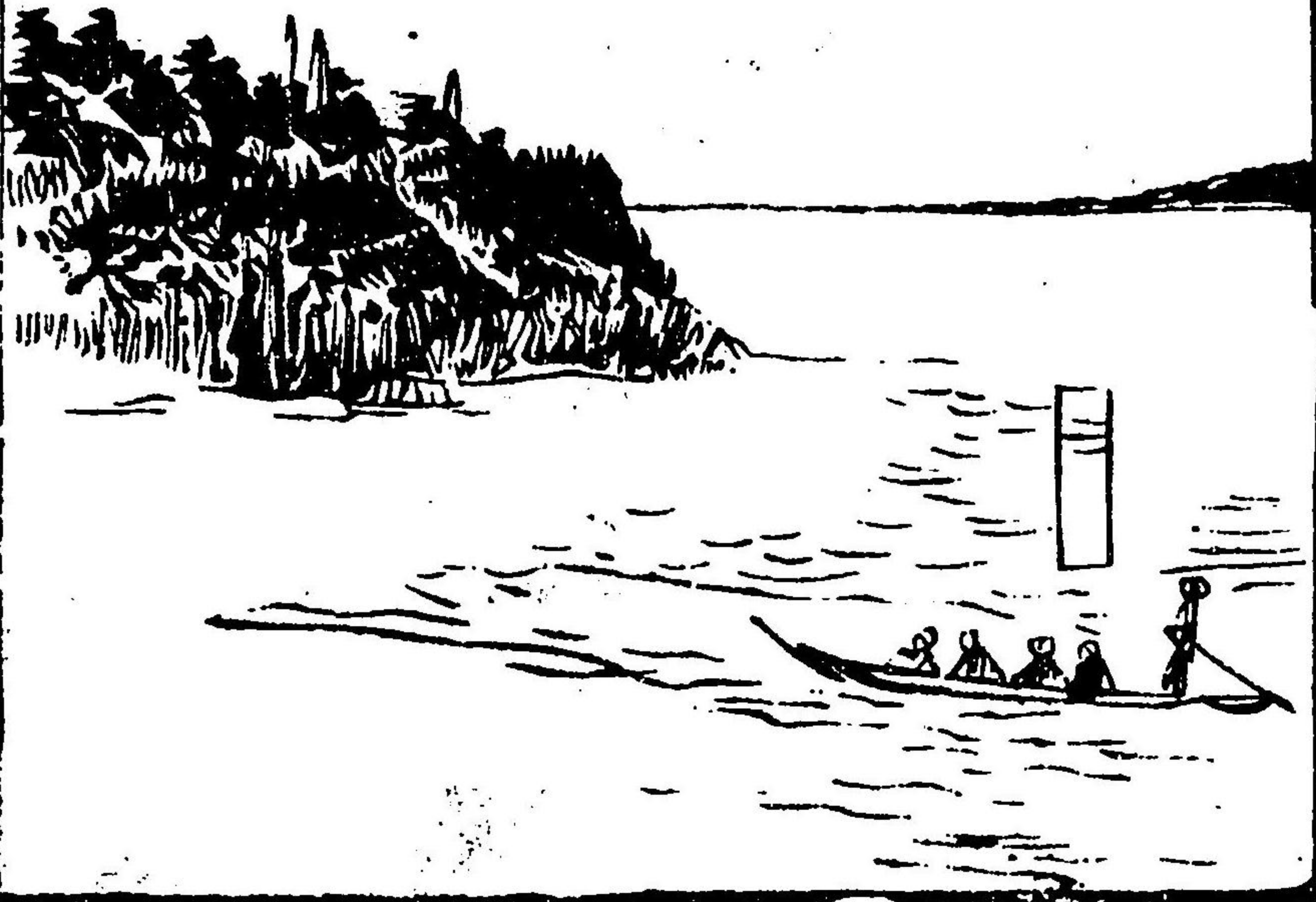
姫鷺の獄によつて聊か志しを

挫かす此時義徒多田藤四郎

以下小舟に乗らば潜かに

至り直ちに掛を破りて望

トシマ



東を棄ふ

高松春風之を

侍らば一室を設け

望東を匿す然るに

病心に罹りて自由を

得ず藩主

医を遣り亦衣服糖菓を

贈りて慰む望東感泣し

其恩を謝す

慶應三年

長州三田尻

に於て死す年六十二



江州膳所の藩士なり京師に上り長藩岡村熊七に後

て学ぶ時父文父三年輦下に変あり其師岡村帰藩

せんといふ良之助父彦右衛門と謀り岡村に後長州に

至る然るに長藩の士良之助が

勤王の

志し

を知らず

疎くして血涙を流

自殺をせんとす師岡村堅く止むの事

復籍の命あり帰藩に臨みて長公銀二十枚を賜ふ

栗屋良之助



良之助の膳所に帰り一時用ひし
しも又讒にまひ再度京師に走る

元治元年幕府の兵諸藩有志の士を捕ふ良之助ハ老ふまを



遁れ

大坂に至り

長州郷に入んとす番兵

門を閉て容れず因て長州に

走るとす途中におひて先師

岡村に面會して従ふ此時真木

保臣兵を率ひて山崎に来る良之助

大ひに歡び其陣所に至り會藩を撃んと

議す是より義徒まより勇氣を

逞ふ討會の論已に決す幕府の



兵ハ之を知る者カ
 不意に鷹司邸ヨ
 押寄る良之助ハ
 必死を
 極め
 大刀を
 振り廻し
 に当り遂に
 門外に戦死す
 時に歳二十四



越後三條驛の久に
 其性質拙介尤教言寡一京師に
 おひて藤木鐵石伴林六郎と交りを
 深くす文久三年

村山秀一郎

藤本大和に養
 兵を奉り
 戦死す
 秀一郎ハ播
 州に在リが京に上りて姿を
 藤本の妻子を尋ね幸中一々京を立退其郷里に



送る又渡名し本國に歸り隣村の
 豪農小柳春堤が
 別荘に忍びあり
 鴨松溪と又相謀る
 時に戊辰の春高倉
 三位鎮撫惣督と
 して下り賜ひ
 かバ秀一郎ハ開運
 の時至りりと大ひ
 歡び北越平定の



到りしが其意を達せぬ
 時の官賊兩軍入乱れ
 戦ひ賊兵まさり
 熾なり長岡城も
 賊軍の擧ぐ所なり
 秀一郎も遁れて袋
 村なる近藤某方に
 到る又小柳鴨の両名ハ
 賊兵に捕へられ死す
 此時秀一郎ハ近藤某の家
 財を山中に運び其身姿を替へ



長岡

山中に在ると十余日然るに賊軍大ひに
 振ひ亦其近辺に充滿す秀一郎ハ進退

茲に谷り此上
 賊手に罹りし

と兄弟に書を
 送りて屠腹す時ハ

歳四十四

六月十四日ナリ



作州魚田郡の人なり勤王

安藤鐵馬

の志しを以て我家を出んと
 す時ハ老母傍に在て教訓し衣服を

與つて送る鐵馬夫より水口の人豊田

謙二に後ひ文武不達す時に天下

己に乱れんとて勤王

の士諸々は集る甲子

の夏幕府の夷貞
 京師を搜り義勇の士

官部松田を始めとて數十人を

殺す安藤ハ三條の客舎にありしが



新選隊押寄引立ゆゆんとす鐵馬自若とて
 進み出りし朝食せす少く猶豫あれと
 云捨薪を燃湯を沸し食する
 歎惋又衣類を改め新選隊
 の士と共に出る二兵前
 後を囲み川原町に至る
 鐵馬遽に抜刀大唱
 叫んで前ある一人を斬殺す
 其術の長ずや新選隊の士と魚も
 及ぶ者あらず然るも猶後を逐又



大いに戦ふと魚も鐵馬ク勇や優りけん竟に
 討果して走り長州郷に至る此時鐵馬ク勇名
 高
 爲に幕の
 搜索又嚴
 此秋長藩入
 京一々會
 藩を伐つ
 鐵馬此軍に
 が會藩の防戦却つて長人を退かす



鐵馬必死を極め草身
奮つて敵六名を
斬り且戦ひ且退
きて鷹司邸下
至りが
追兵急
に弾
丸雨の如く
竟に流弾面中りて
死す時小七月十九日



橋本半助

上州沼田の人なり少き時より
浪花に遊び竹篠崎
小竹に後ひりて文
学に達す其性
質勇氣衆に
勝れ且慈仁あり
貧窮の者と見る時ハ
金錢ハ更なり衣服を
脱すも救はざるが
又酒を好みて楽しみとなす



のより近衛家の召に
 應じて米邑の教授となりしが
 数年を經て辭す再度
 浪花に來り借宅して
 あつてが商業なるに由り
 文を賣りて活計す
 或人勸めて曰く斯
 裏家にあんより
 門戸の高入なるを
 借り受教授あるべしと
 すむ半助大ひふ笑つて隨ハす



素より勤王を主張し
 同盟と謀り専ら時政の
 事を論ず元治元年
 洛中に變ありてより
 幕府正義の士を捕へんと
 其搜る又甚たり半助が
 友人に藤井藍田と
 する者あり長藩に
 通するを以て捕へる
 其後を家を搜り
 橋本半助が書東を得たり

藤井藍田



囚て
直ちに
半助を
捕へて
獄に下
せしが
翌年の夏
病ひ發して
獄中に死す



筑後の國水田天神の祠官なり
素より勤王の志一深く
始め水戸に遊び文学に
勉勵し郷に歸り慷慨
又甚し時に堀田信篤
京師に上り交易の
事を願ふ保臣之を
聞て三條内大臣に上書す
此時有志の徒建議する者
又多し保臣薩刀刃に至り嶋津和泉と
謀る和泉上京に及んて

真水保臣



天下の義徒大坂に集り皇室を
 恢復せん謀り浪士も各々
 其手配りを為す保臣又浪花に
 来る此時棟樑の諸士保臣
 を一て前とかり進退
 共に其指揮を守り背く
 者ハ軍法に行わぬんと
 保臣を尊敬して伏見に
 至る薩藩の士之を止むるに
 過激に涉り大山綱良



大山綱良

橋口莊助を斬殺す其
 奮勇に恐怖して浪士の暴挙
 爰に止する保臣以下幽閑
 せざる文久三年ゆるとせ
 上京す有馬慶頼
 保臣を召し國事を談論す
 保臣薩藩の義氣を述べて
 謀るん所なく薩藩に
 至る帰れハ讒者の爲に
 又捕へる中山忠光長川ふ在り之を



橋口莊助

間て救ひ公保臣長州に送られ

又入京す諸卿之を礼

遇す保臣益夜國

事に尽力一鳳輿を

幽嶺に移一幕府の

罪を正せん

成す元治

元年久坂玄瑞

と天王山に據り

戦ひ一か戦果敵

保臣血戦し天王山に

引上り自害す年五十二

又兵を出し大ひに

せず久坂ハ死す



河本正安

越後魚沼郡十日町の人なり

幼名杜太郎と云ふ後

豊原邦之助と改む

其始め医学に志せしが

半途にりて芳野金陵

の塾に入りて讀書を勉

め會講の席に臨みても

睡眠す又射の聲雷の如し

然れども忠臣義士の語一度



故に金陵

竊に正安の
上を危ぶみ
之を警戒する事

又屢たり夫より刀法を

伊庭先生の門に入り勉勵する

寒暑風雨を厭はず其術頗る

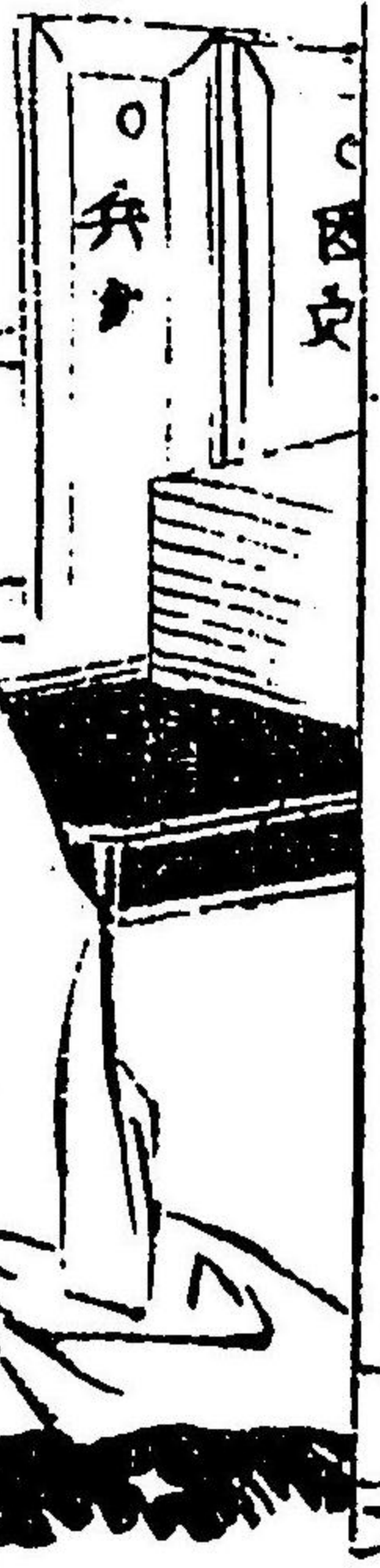
捷技に至る伊庭先生印可を

與へんとす然れど受ず或日時勢

を學生と談論して大ひに

激し抜刀して迫る金陵先生

之を責めて其熱を逐ふ正安



芳野金陵



河本正安

借家して

草履を作りし

尚々小衆人

笑ふのみ少く

買ふ者あり

正安自念一具

服橋の濠に捨る

時に友人又坂玄瑞

之を見て又大かたに

笑ふ然して我家に

連行衣食を興ふ

正安抑原を過るの時

姪文造に會し忠孝両

長川



道を教訓す其後同盟
 幾輩と老中安藤對馬
 守を坂下門外に多ひて
 撃んとす其奮勇に
 當る者なり然撃と
 能はず閣老逃れて走る
 正安飛鳥の如く之を
 逐ふと亦も本懐を
 達せず後上前後を
 困せし正安力戦し
 爰に死す時に壬戌
 正月十五日年
 二十二



僧 胤康

武州豊嶋郡に生る六歳にして家を出る
 日向の慈眼寺に住す倣儻奇才あり好で
 兵法を講ず嘉永年間岡藩の老臣中川
 式部に面會す式部聖人の
 道を胤康に問ふ胤康

自若とて答て曰く
 聖人の道を行ふ者ハ
 皆聖人なり及令萬
 卷の書を讀とも其行ひの
 非ハんバ何かせん今や幕政の
 擅まらざる其兇暴董卓曹操に
 過たり義士誰か歎かんと此際に



當り義兵を興手なば天下の武士勤王の
 大志を興一必らず王政に復すべしと
 して式部との説明に感ト又問ふと
 曰くも一我君之を聴かんば
 如何せん洵康莞爾と
 申すや一君用ひ
 せんば知主を立
 ば一是臣の仕あり
 天何を疑ん若其際に
 至るまで因循に過をばま
 大ひなるも悔あるべしと
 皆和漢の書を引て論ず



式部又問ふと曰く
 然るも一ども具
 行ある處ハ天道に
 懈少や尚明示せん
 事をなす不時に洵康
 膝を進す一四時
 循環して暫くも
 止まず 昼夜あり 風雨あり
 春ハ生一夏ハ滋一秋ハ敗り
 冬ハ殺す由ハに物を生ずるハ
 天道なり 物を敗るも天道なり 大業を成



生民を救ふんと欲する者
 豈小節を顧るに足らん
 其論に收す祖康
 夫より萬事の外他あり
 然るに松崎其始終を
 藩主に告ぐ亂康を捕へ
 獄に下す居る四年竟に京師の
 獄中に死す岡藩の士之を惜む



仙臺の藩士なり

博学秀キにして武術に

三好監物

達す慶應三年

將軍大政を奉

還し朝廷

甲達慶邦を

召す此時監物参政と

たり代見の戦争を用て掃鏡

一大隊を率いて上京し奥羽鎮撫使

下向に付て帰藩す又坂英力なる者

あり藩に歸りて自ら去りて官軍に抗せん





と士民を
 煽動す
 會藩および
 米庄二藩に通ト
 まりく暴威を
 逞ふす監物あれに討論
 頗る過激に渉り其成トおろそを
 知りて東山黃海村に退く其後
 諸道の官軍一時に押寄奥羽
 の兵敗るに及んで反正帰順の
 者多し此時村臣再度監物の

世に出入事を畏れ百方讒を構つて
 遂に冤罪に陥し八月に至りて討手の
 向ふんとす監物疾聞て三人の
 子を膝下に召寄我大義を
 令し尚不教訓を及べ又
 老母に決心を語りて曰く
 吾死して忠義の鬼とならん
 國賊を滅べし我君を
 青天白日を仰がば下りめ度と語る
 母莞爾として憂ふる色あり又三子を呼



我死して三十日に出す

國論及正に及ぶべし云々

教戒し酒宴を設け家臣

小寺正兵衛を呼家

事と分る遺物を

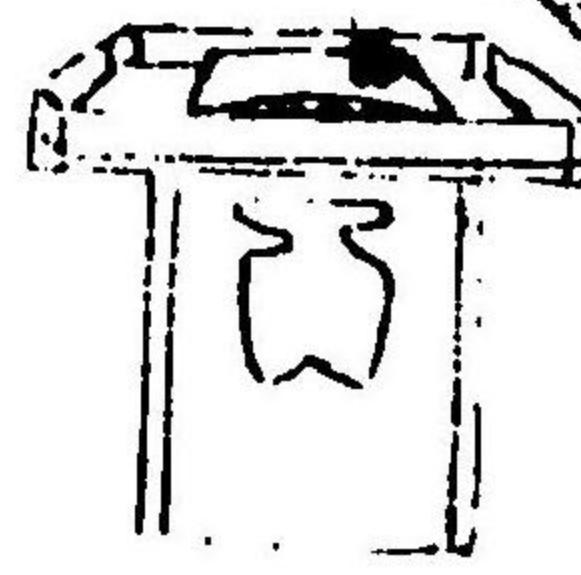
分与し其夜家人を退け

屠腹して死す時五十四歳

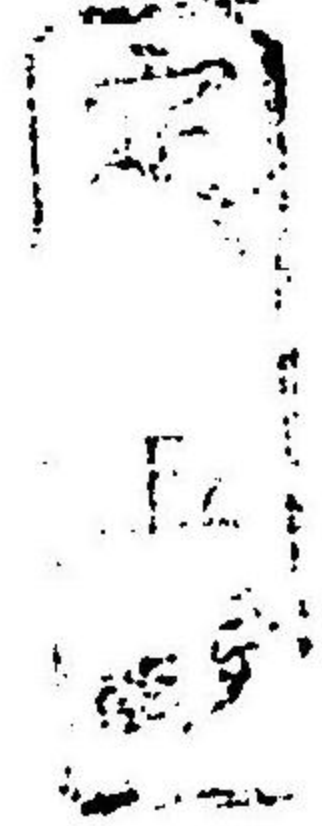
八月十五日なり辞世に

此の為りす我々の公を憐れき事あり

その他教章あり異事



明治十四年八月廿九日御届
同年十月十日出版



編輯人

下谷通新町六十八番地
平民

松本長四郎

出版人

下谷通新町六十八番地
平民

松本六右衛門

